りびんぐらいぶず　令和2（2020）年11月第1号

救いの御名のほとけさま

ー高島組通安寺報恩講讃仰の御法話ー

◆ご讃題

汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん

(Ref『散善義』七祖注釈版 p467)

◆はじめに

皆様ようこそお参り下さいました。しばらくお取り次ぎをさせて戴きます。不肖は、今から七年前のできごとを忘れることができません。その日、私と坊守は初めてブラジルの地に降り立ちました。

百年前に移民された日本人の二～五世の皆様が営まれる「南米仏教婦人大会」を支援するためだったのです。

ところが、千人規模の大会と聞いて失敗は許されません。思い余って梯　和上をお訊ねしました。今お話するとすればこんなお話になりそうですがと

和上はにこにこしながら「お念仏は難しいものじゃない。これでいい、行ってらっしゃい」とおっしゃいました。

現地の総長は「是非来て下さい」とおっしゃいました。

「行け」というお声と**「来たれ」**というお声に安心して私は現地に渡りました。

忘れ得ない二河白道のエピソードでした。

※私達は、苦悩の有情であります。聖人は

如来の作願をたづぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり（正像末和讃第三十八首）

とお謳いになりました。如来様の仰せの通りにお念仏すれば聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、**「汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん」**との如来様のお喚び声でした。釈尊は**「すでにこの道あり、きみただ決定してこの道を尋ねて行け」**とおっしゃったのです。**来たれ**と**行け**によって、衆生は二河白道を励まされて歩めるのでした。

大会では、皆様よくご存じの東日本復興支援歌『花は咲く』を現地の御門徒さんと一緒に歌いました。

まっしろな雪道に　　春風香る

わたしは懐かしい　　あの街を想い出す

叶えたい夢もあった　変りたい自分もいた

いまはただ懐かしい　あの人を想い出す

誰かの歌が-聞こえる　　誰かが励ましてる

誰かの笑顔-が見える　悲しみの向う側に

花は花は花は咲く　いつか生まれる君に

花は花は花は咲く　私は何を残しただろう

これは、悲しみにうちひしがれた衆生が誰かの笑顔をこの目で見（見遇)、誰かの歌をこの耳で聞いて(聞遇)、励まされ立ち上がりやがていつか生まれる君に何を残しただろうと自らに問いかける歌だと窺われます。

それがそうと分かるのは、衆生が立ち上がり、まだ見ぬ君がこの世に生を受け、物思う年齢に達したときですね。するとこの歌は支えられた衆生が次代に伝えるお念仏の姿だとみることができそうです。

この歌の中に**「聞こえる」**という言葉がでて来ますね。「聞こえる」、「聞こえて下さる」とは、浄土真宗で**「聞名」**と云われるとても大切なお言葉でしたよね。

只今の私の悲しみの向こう側に誰かが私を励ましている。その歌声で私は蘇ったのです。有難いですね。私はひとりで不安がることはなかったからです。

「誰か」とは誰か。私は知らなかったのですが、これこそ南無阿弥陀仏の仏さまだったのではないでしょうか。

日本に伝わった大乗仏教が本当に花開いたのは、法然上人によってお念仏一つでお浄土に生まれることのできるみ教えが誕生したときでした。

親鸞聖人は、その本質は、如来様から回向された行信一つだとおっしゃったのです。

南無阿弥陀仏の**「南無」とは「帰命」、「帰せよの命」、「私の願いを聞いておくれ」**と阿弥陀様が本願のお心から切なる願いで喚び続けていて下さるお喚び声だったのです。

◆阿弥陀様の切なる願い

親鸞聖人のすばらしいところは、阿弥陀様から賜る信心とは、聞こえて下さる南無阿弥陀佛をお喚び声とお聞かせに与ること、聞くこと、聞 だと仰せになったことです。

信心は「疑わない」というネガティブ表現であり、お救いに与る Phase 変換の一瞬ですからただ一度であり、信心獲得に至るプロセスが見えませんが、聞くことといえば、繰り返しが赦され**三昧**に繋がります。

私達の経験世界では如来さまから賜ったお念仏を仰せの通りに称えれば、お名号が聞こえて下さるという “ 聞名 ” を実感する(聞遇と申します)ことができるのです。

◆お東の香月院深励師のお弟子一蓮院秀存(1788～1860）師は、

◆**「声しあらば　あやふからじな　火に水の　　なかのほそみち　見ゆも見えずも」**

とお歌いになりました。

「中の細道」とは、如来様のお喚び声に喚び覚まされつつ歩む二河白道でしたよね。

信心は唯一度（信一念義）と承って参りましたが、「聞」といえば、喚び続けていて下さる（喚ばふ）お喚び声に喚び覚まされる三昧に繋がります。

親鸞聖人がなぜ**「聞即信」(一念多念文意第二条)**と仰せ下さったかの訳はここにあります。

◆妙好人の六連島のお軽さんは、

◆**「昨日聞くのも　今日又聞くも**

是非にこいとの　お喚び声」

とお歌いになりました。有難いですね。

さすがに一蓮院秀存師は学僧として、浄土真宗の「信一念義」のご法義に煩悶して、

◆**「勅命は　ただ一声と思ひしに**

今日もくる日も弥陀のよび声」

とお歌いになりました。

「今日も来る日も」の(三昧)がいいですね。

◆浄土真宗のご本尊

そのお心を秋の一日人生の悩みを抱えて当院をお訪ね戴いた真摯な青年のご縁で誕生した仏教讃歌**「ふとあおぎみるおすがたは」**にお尋ねして見ます。

青年は、行方も知らず足のむくままに当院をお訪ね下さいました。

気がつけば、掲示板の法語に見入っているご自身に気が付かれ、そのときお寺のご本尊を拝んでみたいとの思いにかられたとおっしゃいました。

「どうぞお入り下さい。」

すると青年は、本堂のご尊前に額ずき、それは丁寧にご本尊を合掌礼拝されました。

ところが、終って一言、

◆**「どういうご利益がありますか」**とお訊ねになったのです。

拙速に利益を求めるのは現代人の姿ですね。

「あなたはご存じなかったかもしれませんが、本日、あなたを駅に降り立たしめ、当院に導かしめ、掲示板に見入らしめ、ご本尊を仰ぎたいと思わしめた大きな力が働いていて下

さったことでしょう。その力に促されるようにあなたが一歩を踏み出された、そこに大きな意義があったのではないでしょうか。お姿も声も見えない法性法身のはたらきです。

浄土真宗のご本尊は、その昔、インドの王舎城の韋提希夫人が大きな人生の悩みを抱えてお釈迦様に救いを求められ、

救いの法を説こうとお釈迦様がおっしゃっるや否や阿弥陀如来が空中にお立ち遊ばした**住立空中尊**のお姿を象っています。

お姿こそは、お喚び声になって現れ給う阿弥陀如来そのお方だったのです。

それは今日の私達も体験できます。

果たせるかな、青年と別れた三ケ月後に讃歌**「ふと仰ぎ見るお姿は」**が現れ出て下さったのです。

一、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば六字と名告（なの）らして
となえてご覧と勧めます

二、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば私に称えさせ
耳に聞こえてよ喚（よ）び給う

三、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
さればかさねてきかしめて
われをたのめとよびさます
なもあみだんぶ

一番は、如来様のお勧め、二番は称名→聞名の次第、三番は聞名三昧の裡に喚び覚まされる道行きです。

◆如来様のお喚び声

◆如来様は、苦悩の衆生を救わんが為に、

お手許で如来様のお浄土に生まれていく（今生では**摂取不捨**のお心に包まれる）如来様の行をお手建て下さって、お与え下さり**「さあ、称えてご覧」**とお勧め下さいます。

◆ご案内戴いたのですから　**「さようか」**とお念仏致しましょう。称えれば、直ちに南無阿弥陀仏と聞こえて下さいます。

そのとき聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそが、**「汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん（ワレニマカセヨ）」**との阿弥陀様の**お喚び声**だったのであり（二河白道）、仰せのままに**「さようか」**と頭を垂れる姿が如来様から賜る**信心**だったのです。

なる程、お勧めの儘に称えれば、直ちに私の上に如来様の大行が働き出され、南無阿弥陀仏のお声が届いて下さいます。

如来様のお心にお委せして称えたのですから、聞こえて下さったものこそは、私の声であって私の声でない。如来様そのお方のお喚び声だったと頂戴できるのでした。それでは皆様ご一緒にお念珠に手を通してお念仏申しましょう。

◆新たなキャッチコピーの可能性

信心正因　称名報恩の御言葉には、どうすれば信心獲得できるかが示されていません。

それどころか「どうすれば」と問うこと自体「自力のはからいじゃ」と切り捨てられてきたのでした（Ref 節談説教の「山伏弁円」）。

「信心正因　称名報恩」の「報恩」をいきなり勧めてもお育てのプロセスが体験できていなければ容易には理解できません。

信心は、浄土往生のための正因であり、お念仏は、信心獲得出来たことに対する報恩感謝となる、という道行きは、人生が問題になっていない限り、聞く姿勢が整って居るとは云えません。これでは、青年の問を一笑に付すことはできません。

◆称名も原因系のエネルギッシュな御言葉を選び直して表現できなければなりません。

◆そうしますと、**信心正因　称名正定業**が最もオーソドックスだったのはありませんか。

ところが、信楽 峻麿先生が主張なさった**「信心正因　称名正定業」**は、当時の○○寮が必至になって否定されたと聞かされます。

我々はどうすればいいんでしょうね。

ここに宗門の一大課題がありますね。

称名を曇鸞大師に習って衆生に許される讃仰行の次元で捉え直せば、◆**「信心正因　称名讃仰」**となるでしょうね。

諸仏如来ならば、お名号の素晴らしさが分りますからこれを讃嘆なさいます。

それをお聞かせに与って衆生は「何と尊いことよのう、まことよのう、まことまこと」と讃仰させて戴くのです。

第十七願のお心です。

讃阿弥陀仏偈和讃第三十首に曇鸞大師のお徳をお称え下さったご和讃があります。

阿弥陀仏の御名を聞き
歓喜讃仰せしむれば、
功徳の宝を具足して

一念大利無上なり。

信心獲得のプロセスアプローチでは◆**「信心正因　称名聞名」**となるでしょうね。

私達はすぐには信心獲得できませんが、お喚び声と案内されれば、聞いて聞いて聞き抜く三昧の裡（うち）に終に如来様のお喚び声だと目覚めることができます。聞こえて下さるお喚び声は、私の行の次元を超えています。

瓜生津隆眞先生は、妙好人木下マサさんの語録をひとつひとつひもとき、マサさんには、聞いて聞いて聞き抜いてゆかれた厳しいお聴聞があったとおっしゃいました。

◆親鸞聖人は**「聞即信」**と仰せ下さった。何ゆゑ**「聞即信」**と仰せ下さったか。

本願成就文に別の御言葉として現れる「聞」と「信」とを何ゆゑ一体のものとして取りあげる必要があったのか。

却って、正依の大経第十七願、第十八願文には「聞」自体がなかったからか。

困難な課題ですが、不肖は、妙好人お軽さんのお歌、一蓮院秀存師のお歌から、次のように頂戴するようになったのです。

「信」は、お救いに与る Phase 変換の一瞬ですから唯一度であったとしても、「聞」はプラクティスだから三昧を許す。両者は矛盾概念でありながら、「聞即信」で結べば、**“静なるままに動の真理を招来し得た”**からではないか。

「信」は「疑蓋無雑」のネガティブ表現の儘ではプラクティスとしては難しいが、「聞」なら繰り返しにより三昧の境地に導かれます。

お喚び声の主は如来様、衆生は其をお聞かせに与り、三昧の内に終に喚び覚まされるからです。衆生の常念仏は三昧です。

ただ一度であろうとも丁寧に合掌礼拝し、どんなご利益がありますかと問うた青年の真摯な姿にうそいつわりはありません。

何とかして其のお応えが見つかって欲しい。

問に対するお答えを探し求めて悶々とした三ヶ月が過ぎ去った頃、思いがけず**「ふと仰ぎ見るお姿は」**という讃歌になって現れ出て下さったのです。

全く「ふと」のありさまそのままに

国際伝道で翻訳が完成してまもなく演奏家でもある田淵幸三さんの予期せぬ訪問があり、作曲のお申し出に恵まれたのです。

それではこのご縁に皆様と一緒に讃歌をお歌い致しましょう。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会十一月一日(日)二十時より
◆仏教婦人会例会十一月十六日(月)十九時半より

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥